

たるに風波のうれひをのがる、といふ事いかなるゆゑといふ事は未考、貞享四年刻年中風俗考案るに、ひいなをば、井をほり、やねふき、柱立などにも立用ひて、祝するものなれば云々、享保十四年印行、女用花鳥文章、ひいな云々、井の内に入て、清水をもちのるなど見えたり、

〔四方のあか下〕初雛賦

門びらきの御祝儀すみ、眞綿のつむのもてあそびもの所せく、桃のやうく、咲そむる頃、この子のこゝに嫁べき、雛あそびの調度求んと、十軒店の二階に、雲の上の雲を掴み、麴町の室咲につくり花の花を飾らんと、鶏合の牝雛ときをす、むれば、潮干のひかぬ父親の心こそをかしけれ、内裏雛の袖はかけ鯛の尾をさかだて、次郎左衛門の丸顔は、玉子に目鼻つけたらんがごとし、紙ひいな、雨ふりに腰は立すと、てるく、法師の形にて事たりなんを、今は古今の雛の装束の詮議より、大宮人を裸にして、折からの桃華薬葉に、一條禪閣のお肝を潰させ、ふらそこの壺井も、義知ざちと爪をくはふべし、小人形の寸は箱のふたにあらはれ、男とも見え、女とも見はやすべきかたは、あらぬが、長たぶの首うちかたぶけ、足のうらより竹釘を打付けられたるもいたく、しからくりこそ猶をかしけれ、略中近頃、雛子方といへるもので、来て、切禿のせんじをもて、芝居の下座にやうつしけん、笛小つゝみおほつゝみ、太鼓地謠まで一を欠ては、事足ぬ心地ぞする、裸人形は腹掛に美をつくし、六尺の手まはりは鉢巻に氣をつけたり、まして調度は乗物外居のみに限らず、御厨子黒棚は、東山殿の床飾を欺き、筆筒長持は座敷杯の二間かと疑ふ、一雙の屏風は柳櫻をこきませ、式正の本膳にあさつき、繪蛤もをかし、毛氈しき幕うち廻し、落雁の鯛、杉折の沙魚、草餅の菱、豆わりの霰、山川白酒は豊島屋、矢野を傾け、饅頭干果子は鈴木金澤を盡すか、れば紫清少が筆すさみは、ゑらす、加田粟島の故實は、猶さら、疎々しけれど、世にをのこゝもちて、のぼりいかめしげにたて並ても、栢餅粽の皮を剥もうるさく、干鰻かさごの齒にはさまらんより、先何